

位置天文学シンポジウム

古 在 由 秀*

昭和46年度の位置天文学シンポジウムは11月17日から20日まで、箱根の文部省共済組合の静雲荘でひらかれた。何年か前までは位置天文学関係のシンポジウムといえば、十数名の参加による経緯度研究会だけであったのだが、天体力学の研究会がその後はじまり、衛星測地学のシンポジウムなども最近ではひらかれるようになって盛況となってきたのである。今年度は天体力学の研究会だけは別に開かれることになり、あとはこの箱根のシンポジウムにまとまり 40 名以上の参加者があった。

今回の主なテーマは、最近の新しい観測装置についてで、VLB (超長基線電波干渉計)、月レーザー測距装置、人工衛星ドップラー観測装置などがとりあげられた。これらの装置はいずれも日本にはまだないのであるが、諸外国ではすでに観測がはじまっており、アメリカとオーストラリアを VLB でむすんでオーストラリアの測地原点の座標を補正したり、人工衛星のドップラー観測では極軌道の決定がすでに行なわれている。月レーザー測距の実験は東京天文台で一応行なったが、ちゃんとした観測装置はなく、予算請求中である。

従って、新しい観測装置についてといっても、今回はその勉強をしたわけで、今のうちから充分検討を重ね、我々としては近い将来これらの装置を手に入れて是非とも実際の観測を行なって実用化していきたいと考えている。

人工衛星測地については、東大宇宙研の新しい科学衛星光学追跡装置、水路部で行なった父島の座標の測定、硫黄島についての計画、2年前に行なったペーカー・ナンと AFU との比較観測などについても報告があり、ドップラー法をいかにとり入れるべきか議論が行なわれた。

経緯度研究会関係の論文も 10 以上あり、恒星位置の

問題、極運動観測におよぼす種々の影響などについての報告があった。

位置天文関係の上述した新しい観測装置では、従来我々のとりあつかっていなかったレーザー、電波の技術がとりいられるので、他の分野の人達との協力も不可欠になり、また、観測装置や測定器の自動化の問題でも天体物理や電波天文との共通部分が多くなりそうである。位置天文学関係の研究者の一人として、日本での新観測装置の開発のために多くの方々との理解と協力をお願いするとともに、伝統ある日本の位置天文学がふたたび一流の装置をそなえつける日の近いことを期待したい。

なお、このシンポジウムの間に位置天文学連絡会の会合があった。位置天文学連絡会というのは規約も特定の会員もないあまりはっきりしない会であるが、数年前から定期的に毎冬会合がひらかれており、経緯度研究会、天体力学研究会、SAM の一部の人達がなんとなくメンバーになっている。世話人ははじめ虎尾正久氏がつとめられ、竹内端夫氏をへて、今回の会合で飯島重孝氏にかわった。また、このなかにこれはメンバーのきまっている将来計画委員会があり、今回からその委員長は安田春雄氏がつとめることになった。

また、9月には位置天文学分野での計算機関係者の会合があり、この分野での協力体制を作ることが議論されたのであるが、ここで徳弘敦氏を世話人とする幹事団が任命され、今回の箱根のシンポジウムでこれも位置天文学連絡会の下部団体として働くことになった。

位置天文学連絡会では毎年文部省の科研費である総合研究の班づくりを討議してきたのであるが、今年は科研費申請のしめ切りがはやくなって、今回の会合をまてず 2, 3 の人が相談してきめてしまったのであるが、総合研究のあり方についていくつかの意見がだされた。このような議論はかなり重要なことなので、将来は天文全般について意見交換の場をもつことが必要になるだろう。

* 東京天文台